



編集月旦 2016年9・10月合併号

★web「月刊丈風」50号特集として、これまでの経緯を未来へと繋ぐ「ニッポン発二一世紀オリジナル ～脈としての日本長寿社会～」をまとめました。戦後平和の70年のあいだに蓄えてきたさまざまな分野の成果は、毎年秋恒例の「ノーベル賞受賞者」発表で海外からその一端

が知らされます。今年は医学・生理学賞を大隅良典・東京工業大学名誉教授が受けました。ご存じのようにノーベル賞は医学・生理学賞、化学賞、物理学賞、文学賞、平和賞そして経済学賞があるのですが、ひとつ、その気配すらないのが経済学賞です。

☆思い返せば、35年ほど前の1980年ころには『ジャパン・アズ・ナンバーワン』（1979年刊“Japan as Number One: Lessons for America” Ezra F. Vogel、ことし中国で翻訳出版された書名は「日本第一」）とまでいわれて、海外からも関心をもたれた日本経済でしたが、そのあと「バブル」がはじけて「ゼロ成長」の迷路に紛れこんでしまい、「失われた10年」（2000年）がいわれ、「失われた20年」（2010年）がいわれ、アベノミクス効果も色あせて、日本経済の「失われた30年」がいわれようとしています。

★未来へと開かれたわが国の経済社会の姿を呼び戻すには、4人にひとり、3400万人という社会的ボリュームを得た高齢者（65歳以上）層が、「高齢世代」として登場し、潜在力を発揮して、総力をあげて次のような課題の解決に当たる以外にありません。

1・「高齢社会対策基本法」と「高齢社会対策大綱」20年の検証

本来なら節目に当たって経緯を振り返り、成果を確かめ、将来を見据え直す行事が政府筋からあってもいいところですが、その気配は見られません。独自に検証を。

2・「人生90年時代」意識の醸成

「大綱」（2012年改定）が指摘する「人生65年時代」から「人生90年時代」への高齢期25年の延伸。「引退余生」ではなく「現役長生」による高齢者意識の醸成を。

3・史上初の“高齢世代”が登場して「高齢社会」の形成を推進する

これまで20年の高齢化対応は、国が中心になって「高齢者対策（ケア）」（介護・医療・福祉・年金など）を進めてきました。高齢者（65歳以上）が社会的ボリュームを得て「高齢世代」が成立した新たな20年は、高齢者みずからが居場所の創設、「助け合い」など社会のしくみの変容をおこなって「高齢社会」の形成を推進します。

4・「アジアの共生」（モノの豊かさの共有）の次へ

「途上国の日本化」で生じた「日本の途上国化」（企業の非正規社員や暮らしの百均製品化など）を乗り越えて、わが国の高齢者層の生活感性に見合った優れたモノ・サービスを創出して、高齢化途上国のモデルとなる「高齢化社会経済」を成し遂げます。

5・高齢期に必要な知識・技能を習得する地域大学校の設置

「人生90年」を地域で安心して暮らすために必要な知識や技能を学ぶ地域大学校（中学校区単位で「新地域支援事業」の第二層）を設置し、住民が生きがいと知識・技能と生涯の学友を得るとともに、特性を活かした「まちづくり」に資する高齢人材を養成します。

6・青少年・中年層との「三世代交流」

性急な「世代交代」ではなく、青少年＋中年＋高年による「世代交流」を通じて課題を共有し、「三世代平等社会＝長寿社会」を指向します。

★一人ひとりが長寿を喜べる「日本長寿社会」の達成とアジアに住むだれもが等しく豊かさを享受できる「アジアの共生」は、ふたつながら平和の証であり高齢者の課題であり、本誌の目標です。（編集人 記）

